

## ワークシート⑤ 「小説に書かれていない場面を想像して、考えを交流しよう」

一年 組 号 )

●心情や行動を表す語句に注意して読み、登場人物の心情を想像しましょう。

○「僕」の心情が分かる表現にマーキングをしましょう。

○最も想像が膨らむ心情描写を1つ選んで書き出してみましょう。選んだ情景描写は傍線部。

「僕の熱情はまだ絶頂にあつた。」ととしても、そのときほど、僕は興奮しないだろう。」  
「クジャクヤママユほど僕が熱烈に欲しがっていたものはなかった。」「幾度となく、僕は、本の中のその挿絵を眺めた。」「僕は、すっかり興奮してしまって、く待ちきれなくなった。」  
「僕にはどのくらいうらやましかったかわからない。」「せめて例のちようを見たい」「僕は、その上にかがんで、く残らず間近から眺めた。」「胸をどきどきさせながら、僕はくたいという誘惑に負けて、「すると、四つのく斑点が、挿絵のよりはずっと美しく、ずっとすばらしく、僕を見つめた。」「それを見ると、この宝を手に入れたという、逆らいがたい欲望を感じて僕は、生まれて初めて盗みを犯した。」「そのとき、さしずめ僕は、大きな満足感のほか何も感じていなかった。」

○心情を想像するのに重要だと思われる語句の意味を調べて、理解を深めましょう。

誘惑	人の心を迷わせてよくないことにさそいこむこと。また、そのさそい。
(逆らい)がたい	くするのがむずかしい」という意味を表す。接尾辞
※僕を見つめた	擬人法。「斑点が僕を見つめた」というように、自分の意志とは関係なく斑点から見つめられているというように表現することで、無心になつていることを感じる。また、生き物のように魅力的な斑点であることを表す。
さしずめ	言ってみれば

○言葉の意味を調べることで気が付いたことや心情の理解が深まったことを書きましょう。

「逆らいがたい」とは「逆らうことがむずかしい」という意味だ。「僕」は欲しくてたまらなかつたクジャクヤママユを目の前にして、「逆らうことがむずかしい」欲望を感じて生まれて初めて盗みを犯してしまう。ちよう集めのためには食事も忘れてしまうほど熱烈にちように夢中な「僕」である。「盗みはしてはならない」などという常識はふきとんでしまったことだろう。「斑点が僕を見つめた」瞬間は、「僕」の心が欲望に支配された瞬間だった。

○語り手である「僕」から見える「エーミール」の様子が描かれている部分をマーキングをしましょう。

○「僕」は「エーミール」に対してどのような思いを抱いたと考えられますか。マーキングをしたところから考えられることを想像して書きましょう。（本文を引用して書きましょう）

エーミールの様子を表す重要語句

く低く「ちえっ。」と舌を鳴らし、

《見つめる、眺める》「そんなやつ」

冷淡に、軽蔑的に、「結構だよ。」

世界のおきてを代表、冷然と、

正義を盾に、あなどるように

ただ僕を眺めて、軽蔑していた。

想像される「僕」の心情(抱いた思い)

「僕」がクジャクヤママユをこわしてしまったのは、クジャクヤママユを手に入れたという純粋で強烈な欲望が発端だった。クジャクヤママユをこわしてしまったことは自分にとっても衝撃的なことで、申しわけない気持ちでいっぱいである。そんな気持ちを彼は「全然信じようもしない」。悲しい。

○「僕」と「エーミール」の関係がどのように変化したか考えてみましょう。

《クジャクヤママユ事件前の二人の関係》

→

僕はエーミールにとって～という存在である。  
隣の子供

関係  
お隣同士、ちょう仲間

←

エーミールは僕にとって～という存在である。  
羨望の的、気味悪い存在  
ねたみ・憎しみの対象

《クジャクヤママユ事件後の二人の関係》

↓ 事件後

→

僕はエーミールにとって～という存在である。  
悪漢、卑劣な奴、犯罪者、加害者、不道德者

関係  
加害・被害の関係

←

エーミールは僕にとって～という存在である。  
世界のおきての代表  
正義の盾、被害者

☆人間の性質や関係を表す言葉を使ってみましょう。

- ・幼なじみ、同い年、同級生、友達、ライバル、敵、味方、仲間、チーム、仲良し、知り合い
- ・被害者、加害者、犯罪者、裁判官、仁徳者、悪漢、聖人君主、盗人、勇者、愚者、愚か者
- ・親密、疎遠、親友、仇敵(きゅうてき)、似た者同士、対照的、憧れ、羨望(せんぼう)の的
- ・正義(の味方)、悪役、正義、不正、善、悪、真、偽、純粹、不純、誠実、不誠実、忠実

○「僕」はなぜ、自分のちょうを一つ一つ取り出し、指で粉々に押しつぶしてしまったのでしょうか。想像して書いてみましょう。

「僕」はちょうを欲しいと思う強い気持ちから、盗みを犯し、結果的に「エーミール」の大切なちょうをだいなしにしてしまった。こわしてしまったちょうは元に戻すことはできず、「エーミール」は「償い」も「謝罪」も受け入れてはくれなかった。「僕」にできることは自分で自分を罰すること以外になかったのである。そして、過ちを犯す原因となった、ちょう集めの趣味と決別したのである。